

# 幼児と高齢者の世代間交流にみる保育者の意識変容

How kindergarten teachers change their perceptions through intergenerational exchanges

徳田 多佳子\* 請川 滋 大\*\*  
Takako TOKUTA Shigehiro UKEGAWA

**要約** 高齢者施設を合築する幼稚園で行われた世代間交流について、担当保育者の意識変容の検証を目的に半構造化面接を行い、M-GTAによって分析を行った。その結果、保育者の成育歴における高齢者との親密度が世代間交流への抵抗感の程度と関連していること、保育者は不安と戸惑いの中で改善を模索し、教育効果の気づきを得ること、その後は能動的に交流に関わりより良い実践を求めるモチベーションが正のループとなることが明らかになった。より良い世代間交流のために、保育者に対して高齢者についての知識・理解を含めた内容や方法の検討、及び世代間交流の有効性の向上を目指した指導法と体系的な枠組みの開発が、今後求められると考えられる。

**キーワード**：保育者、幼稚園児、世代間交流、高齢者、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

**Abstract** In order to examine how kindergarten teachers change their perceptions of intergenerational exchanges taking place at kindergartens attached to a nursing home, semi-structured interviews were conducted with the teachers directly involved and their responses were analyzed using a M-GTA. Results indicated that teachers' closeness to the elderly in childhood is related to the extent of their psychological resistance to intergenerational exchanges. Teachers explore improvements despite anxiety and confusion, they eventually recognize the effectiveness of education through the exchanges, and then they begin to actively participate in the exchanges and seek better ways to conduct them. This creates a positive loop. In order to conduct better exchanges in the future, teachers will need to examine ways in which they can learn about and understand the elderly as well as methods of instruction and a systematic framework to improve the effectiveness of intergenerational exchanges.

**Key words** : preschool, teacher kindergarten, Children intergenerational, exchange elderly, modified grounded theory approach

## I. 問題と背景

核家族化が進む現代において、子どもが高齢者<sup>注1)</sup>とふれあう機会が減少している。2019年の厚生労働省の調査によると、現在子育て中の半数以上の親がすでに核家族で育った世代であり、子どものみならず、親の世代も祖父母との同居経験をもつ者は半

分に満たない<sup>1)</sup>。さらに地域社会の人間関係の希薄化もますます進みつつあり、その状況の中で地域社会の高齢者との関わりも少なくなっている。

保育で行われる幼児と高齢者の世代間交流<sup>注2)</sup>について、徳田・請川(2019)は保護者と保育者に向けて意識調査を行った。その結果、ほとんどの保護者は知育と徳育に有効な取り組みとして認識していた。一方保育者たちは、高齢者への優しさなど徳育に関して交流の意義があると認めており、保護者の期待と乖離していることが明らかになった<sup>2)</sup>。交流を行う際、効果が得られるための重要なカギは保

\* 学術研究員  
Academic Research Fellow  
\*\* 児童学科  
Department Child studies

育者の関わりであろう。なぜならば、交流を検討してカリキュラムを構築するのは保育者の役割だからである。しかしながら保育中の世代間交流のあり方についての明確な基準はなく、実践研究もほとんどない<sup>3)</sup>。高齢者とのより良い世代間交流の構築は、保育者に任される現状がある。しかし保育者も核家族世代であり、高齢者との関わりに経験不足の可能性が高い。それゆえ交流にあたっては、保育者に不安や葛藤が生じたり、それを乗り越えているプロセスが生じていると考えられる。このような保育者の世代間交流における意識変容を明らかにすることは、幼稚園で高齢者とのより良い世代間交流を行うにあたり、一つの示唆を与えるものと思われる。

## II. 目的

本研究は、合築もしくは敷地内併設される特別養護老人ホームの高齢者と世代間交流を行っている幼稚園で、世代間交流を初めて担当した保育者を対象に、交流に対する意識変容のプロセスを検証することを目的とする。方法は半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAと略す）を用いて検証・分析を行う。

## III. 方法

### 対象者

関東地方の異なるエリアに位置する私立N幼稚園（特別養護老人ホームとの合築）と、私立D幼稚園（特別養護老人ホームとの敷地内併設）で、園長先生や担当の先生から紹介を受けた。そこに勤務する保育者計11名（全員女性）がインタビューに参加した。Table 1に参加者の属性を示す。

### インタビューの手続き

2017年8月～10月まで、個人別に1人あたり平均35分の半構造化面接を行った。面接では、初めて保育中に高齢者との交流を活発に行うことを聞いた時から、現在までの自身の気持ちを尋ねた。発話内容はICレコーダーで記録され、インタビュー終了後に逐語録が作成された。面接総時間は6時間12分、逐語録総字数は97201文字である。

### 倫理的配慮

インタビューを開始する前に、研究目的を口頭及び書面で説明し、発話内容の音声記録・筆記記録、

Table 1 Attributes of those surveyed

教諭	年代	所属	経験年数	勤務年数
A	20代	N幼稚園	4年	4年
B	20代	N幼稚園	2年	2年
C	20代	N幼稚園	3年	3年
D	40代	N幼稚園	25年	11年
E	50代	N幼稚園	26年	14年
F	20代	N幼稚園	3年	3年
G	20代	D幼稚園	3年	3年
H	20代	D幼稚園	4年	4年
I	30代	N幼稚園	17年	12年
J	20代	D幼稚園	4年	4年
K	20代	N幼稚園	3年	3年

及び研究への使用について全員から書面で同意を得た。なお逐語録には個人名をアルファベットで表し、個人情報保護に配慮した。

### 分析方法

逐語化されたデータを、M-GTAを用いて分析した。木下（2003）は分析に適する研究領域として、3点をあげている<sup>4)</sup>。本研究は以下の理由でM-GTAを採用した。

#### ①社会的相互作用

世代間交流には幼児と高齢者、介在する保育者と場合によっては介護スタッフの、直接的な人間同士のやり取りが生じる。すなわち、社会相互作用を有している。

#### ②ヒューマンサービス領域

幼稚園において園児と高齢者の交流を行い、保育者が園児の育ちの支援を行うということは、看護、ソーシャルワーク、福祉、教育といった広義のヒューマンサービス領域に該当する。本研究で得られた知見を実践現場に戻すことで、保育施設での高齢者との世代間交流の活性化や、保育者の支援方法の洗練化に寄与できるのではないかと考える。

#### ③プロセス的性格

交流中に、園児と高齢者と保育者という三者の関係性に変化が生じることが予想され、その変化の過程にはプロセス性がある。

### 分析手順

データから概念を生成し、概念間の関係カテゴリーに集約し、最終的に関係図として提示する。具体的には以下の通り分析を行った。

まず分析がデータに根差したものとなるように、分析テーマを「幼稚園での高齢者との世代間交流で、保育者が実践を通して得た交流に対する意識変容のプロセス」と設定した。また分析焦点者は、「保育中に初めて日常的な世代間交流を行う立場におかれた保育者」とした。

データ分析を行う際は、分析テーマと分析焦点者を意識して逐語録を読み込み、分析ワークシートを作成した。分析ワークシートは概念名、定義、具体例（ヴァリエーション）、理論メモから構成され、概念ごとに作成した。最初は発話内容の深い1名の保育者のデータから分析テーマと関連の深い箇所を具体例として、初期の概念名、概念の定義を分析ワークシートに記入した。次に他の保育者の逐語録

ごとに行い、類似する具体例を収集した。新しい概念は、既出の概念との重複や複合の可能性を確認し、最終的に新たな概念が生成されず、理論飽和に達したと判断するまで繰り返した。理論的メモには、解釈の際に参考になるアイデアや注意点、他の概念との関連性についての検討を記入した。

分析ワークシートによる概念生成後、概念間の関係について理論的メモを参照しながら検討を続け、カテゴリーとして集約した。さらにカテゴリー間の関係を結果図としてまとめた。

Table 2 は、保育者たちの語りから生成された全カテゴリー、概念、定義、語りの一例である。分析ワークシートの作成後に、一覧にまとめた。

**Table 2** All of the categories, concepts, and definitions generated from interviews with kindergarten teachers, and selected examples thereof

カテゴリー	概念	定義	語りの例
前段階の影響	幼少期から高齢者との親しい関わり	頻繁に祖父母等の交流を経験していたことで、高齢者全般に好感があり世代間交流に抵抗がない保育者のこれまでの過程のこと	・私はおばあちゃんとも住んでいたの、おばあちゃんの兄弟もすごく多くて、お年寄りとの関わりがすごく好きだったんです。 (F 保育者) 他 2 例
	高齢者との接触の少なさ	高齢者との交流をあまり経験していない、または高齢者が亡くなるまで元気に生活していたために、相手の年齢を深く思うことなく別れてしまった保育者のこれまでの過程のこと	・私、お年寄りが苦手、でもこの園は他に良いところがたくさんあって。で、就職したんですけども。言っていていか分からないですけど、匂いとかもちょっと苦手なんです。今でもそんなに得意じゃない。 (D 保育者) 他 1 例
交流の受容	自然体での受け入れ	幼稚園で行う世代間交流に対し、自然体で「(交流を)するように言われるならやります」的な受け止めをすること	・そうですね、交流はあったらあったでいいことなんじゃないかなって、それくらいの感じで。あんまりそういうことでの抵抗はなかった。 (J 保育者) 他 1 例
	積極的な関心	高齢者との関わりの土台に良い感情があるため、幼稚園で行う世代間交流に対して抵抗なく受け入れ、交流内容にも強い関心を示すこと	・この園庭で遊んでる子をおじいちゃんおばあちゃんたちが窓越しに見て下さるのが見えたので、そういう関わりがあるというのは分かりました。自分が幼い時からおじいちゃんっ子だったので、そういうところに温かさを感じました。 (A 保育者) 他 4 例
	より良い関わりの努力	ここの幼稚園では世代間交流は避けて通れないと理解し、自分の気持ちに折り合いをつけながら交流に順応するため努力しようとする	・正直大変だなあとは思いました。「あなたも率先してやって」ということは（前の園長先生に）言われました。ちょっとプレッシャーでしたね。でもまあ頑張ろうと思って。ここからは私の勉強かな、という感じでしたね (E 保育者) 他 1 例
不安と戸惑いの混在	保育者だから身構える	自分は保育者であっても高齢者には素人であることを自覚し、園児と高齢者双方が楽しめるような交流ができるだろうかと構えてしまうこと	・自分のおじいちゃんおばあちゃんとちがうじゃないですか。子どもたちからしたら知らない人ですよ。だから私がいても、そんなに盛り上がったたりするのかなあ。 (G 保育者) 他 5 例
	高齢者の感情がつかめない	交流してみると感情が外に出にくい方、迷惑なのかと不安を抱いてしまう方など、高齢者の反応は様々で、それに対して戸惑いを抱くこと	・おじいちゃんおばあちゃんも楽しんでる人はそれなりにいるんですけど、なかなか（表情が）見えにくくて。 (J 保育者) 他 4 例

	<p>園児の尻込みが分かる</p> <p>もっと積極的に高齢者のそばに行くだろうと想像していた園児たちが、緊張から構えたり一歩引いていたり、怖いと保育者に訴えることも多数ある。その様子に戸惑うこと</p>	<p>・子どもたちはわりと一歩引いてる感じというか、口に出したりはないですけど、ちょっと緊張してるなという感じ。何となく人見知りなのか、どういう風に関わっていか分からないのか。「ああどうしよう」という子も結構いたので、緊張してるのかなという感じがありました。(B保育者)他5例</p>
	<p>友だちと一緒になら大丈夫そう</p> <p>高齢者に消極的な園児でも、友だちと一緒になら高齢者の傍に行けるといいう事実を発見すること</p>	<p>・1人じゃなくってお友だちと2人なら行けるといいう子がほとんどで、仲の良い子とペアで声をかけに行かせたり。1人じゃない分行きやすいと、その時思いました。(H保育者)他4例</p>
	<p>スキンシップが効果的</p> <p>交流中に園児と高齢者が手をふれあって遊ぶことが、双方の心の距離を縮めるという点で重要だと思うこと</p>	<p>・“あんたがたどこさ”はやって良かったなというも思いました。おじいちゃんおばあちゃんも知っている曲なので、何回も練習してというものでもないです。単純に「さ」でタッチするリズム遊びの中で、どちらも楽しめてふれあえるのがいいかなと思っています。(C保育者)他4例</p>
<p>教育効果の気づき</p>	<p>高齢者からの援助や応援</p> <p>日頃は身体が動かない高齢者が、園児の着替えなどを自発的に手助けし、積極的に話かけて教えようとする</p>	<p>・お泊り会の着替えを手伝ってくれた時に、いつもは手も上がらない何もしない方が、子どものお世話をすることで手が上がるようになったり。その方なりに一生懸命に手伝って下さるんですね。それがすごいな、いいなという。(D保育者)他4例</p>
	<p>園児にとっての身近な人へ</p> <p>応援や手助けを受けて顔見知りになった高齢者に対し、子どもも親しい感情を抱いていると実感すること</p>	<p>・結構おじいちゃんおばあちゃんが窓のカーテン開けて見てくれることが多くて。子どもから「前に会ったおじいちゃんやおばあちゃん見てよ」って教えてくれたり。あと、手振ってみようかとかいうのも出てきますね。(H保育者)他4例</p>
	<p>やって良かったの実感</p> <p>ただ会うだけで涙を流す高齢者と、その涙につられて泣き出す園児がおり、両者の様子に感激して保育者も嬉しい気持ちになる。そんな場面に立ち会うことで、交流をやって良かったと自ら肯定するようになること</p>	<p>・1人おばあちゃんが泣きながら嬉しいって言って下さった。子どもたちがどう反応するかなと思ったんですけど。「どうしたの、大丈夫？ 病気だったの？」とか言って。他のおばあちゃんたちも握手したりしているのを見ると行って良かったなと思います。(B保育者)他5例</p>
	<p>もっとの改善意識</p> <p>内容について深く検討するようになり、交流の回数や形態の改善点を、もっともっとと考えるようになること</p>	<p>・もうちょっと経験を、子どもたちにおじいちゃんおばあちゃんと関わる経験を。もっと回数を増やしたいと思ったのがありますね。(A保育者)他4例</p>
	<p>手応えと心の余裕</p> <p>交流に慣れてくると、保育者は手応えを感じる。自身が行う園児や高齢者への声がけや仕切りの上達を実感し、少しずつ心に余裕が生じていると思うこと</p>	<p>・入ったばかりの頃は自分のことだけで必死だったので。去年くらいから交流に対して慣れてきたっていうか、本当にいいことしてるんだって確信になった。(K保育者)他2例</p>
<p>最善を探求する実践</p>	<p>思い描く育ちや願い</p> <p>何回も交流して慣れたことで、園児に体験させたいことや身につけてほしい願いを具体的に思い描くこと</p>	<p>・一番は思いやる気持ちとか優しさとか。人生の大先輩じゃないですか。そういう人たちに対する接し方を学んでほしいです。普段の生活でなかなか身近にいない大人に、その方たちの温かさとか、それを感じてほしい。あと思いやる気持ちとか高齢者を大事にする気持ちが育てばいいなど。(C保育者)他4例</p>
	<p>何気ないふれあいが一番</p> <p>世代間交流に対して自分なりの意義を見出し、理想の交流は何気ない会話やふれあいが一番大切で、園児たちにそれを実現させるために能動的に取り組むこと</p>	<p>・はじめは「THE 交流」みたいなのが交流と思っていたんですけど、だんだん保育に余裕も出てきて交流への思いも変わってきたという。自然な会話ができるのが良いと思います。いろいろ制約の中でやらなきゃならないんですけど、やっぱりこういう感じのほうが良いような。(I保育者)他5例</p>

#### IV. 結果

##### 生成されたカテゴリー

結果図 (Fig.1) に基づいて、概念とカテゴリーの関係を述べ、保育中の世代間交流に介在する保育者たちの意識が何をきっかけにどのように変容していくかの構造を示す。以下《 》はカテゴリー名、【 】は概念名、「 」は語りの具体例を示す。

分類の結果、5つのカテゴリーと17の概念が生成された。保育中に行う世代間交流に対する保育者の意識が変容していく過程は、【幼少期からの高齢者との親しい関わり】と【高齢者との親しい関わり】と【高齢者との接触の少なさ】の概念からなる《前段階の影響》、【積極的な関心】、【自然体での受け入れ】の概念からなる《交流の受容》、【保育者だから身構える】など3つの概念から構成される《不安と戸惑いの混在》、【友だちと一緒に大丈夫そう】など6つの概念から構成される《教育効果の気づき》、【手応えと心の余裕】など、3つの概念から構成される《最善を探求する実践》という5つ

のカテゴリーに分類することができた。図の左から右に時間軸があり、時間の経過とともに交流に対する肯定的な思いや意欲的な態度が強まる傾向が見られた。《教育効果の気づき》は保育者の交流に対する心理的变化が生じる場面であり、コアカテゴリーと考える。

##### 結果図とストーリーライン

保育における世代間交流は、誰でも最初は未経験である。保育者がこの幼稚園に就職するまでの過程から、【幼少期からの高齢者との親しい関わり】をもつ保育者と、【高齢者との接触の少なさ】の中で育った保育者に大別できる。この《前段階の影響》は、保育中の交流を受け入れる際の、自身の気持ちに反映される。

祖父母との同居などで親しい関わりの経験があると、交流への抵抗が少なく【積極的な関心】や【自然体での受け入れ】を行う。反対に高齢者とあまり接することがないまま育っていると、自分の気持ち

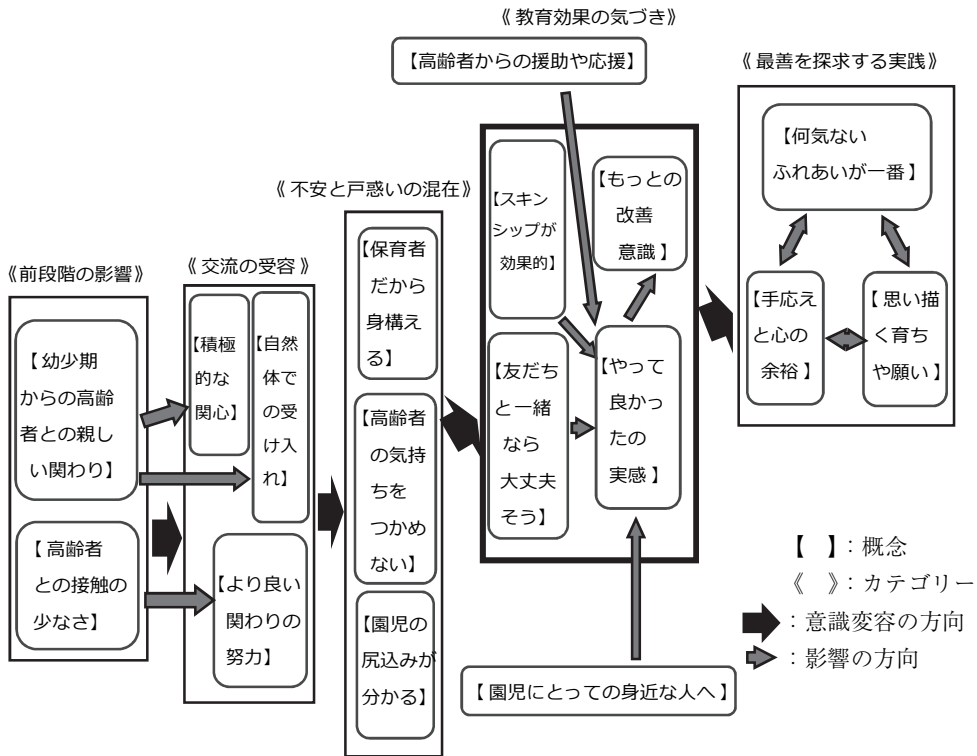


Fig.1 The process of changes in the perceptions of kindergarten teachers as a result of intergenerational exchanges in kindergartens

に折り合いをつけながら【より良い関わりの努力】を行い、園のカリキュラムに順応していく。

しかし高齢者との経験の多少に拘らず、皆が【保育者だから身構える】。自分が双方の間に立つ際に、楽しく交流できるか不安になるのである。交流中に【高齢者の気持ちをつかめない】、【園児の尻込みが分かる】といった気持ちを抱き、戸惑ってしまう。このような《不安と戸惑いの混在》が交流の初期には見られる。

しかし交流を重ねるうちに、高齢者に消極的な園児には【友だちと一緒になら大丈夫そう】と判断し、積極的に関わる友だちと一緒にそばに行くことを促すようになる。また、交流活動には【スキンシップが効果的】であることを実感する。園児の着替えなどの場面で【高齢者からの援助や応援】を受けると園児と高齢者との関わりが増え、顔見知りになっていく。【園児にとっての身近な人へ】と、子どもなりに高齢者への接し方が変化していくのである。何より高齢者がとても喜ぶ様子、涙ぐむ姿にふれて、保育者自身も【やって良かったの実感】をもつ。そして、交流を自然なやり取りのできる場にしたい、機会を増やしたいなど【もっとの改善意識】を抱くようになる。このように《教育効果の気づき》が生じる。

世代間交流に慣れてくると、保育者自身が【手応えと心の余裕】をもち、活動内容に【思い描く育ちや願い】を意識しながら、理想の交流は【何気ないふれあいが一番】と認識するようになる。このように《最善を探求する実践》がなされ、3つの気持ちが相互に作用を及ぼしながら、循環的に保育者の意識と取り組みの向上をもたらしていく。

## V. 考察

### 1. 世代間交流の受容に至る差異の要因—成育歴における高齢者との親密度の影響

保育者が世代間交流に関わる前段階、すなわち成育歴において、祖父母や近隣の高齢者との近い交わりの経験をもったか否かが、《交流の受容》段階で高齢者の受け入れの容易さの程度に影響を及ぼしていることが明らかになった。幼稚園や保育所での世代間交流というと、高齢者との関わりが少ない園児たちにそのような経験をもたせる機会という視点のみで捉えがちであるが、20代～50代の保育者の世代もまた、核家族化と地域社会の人間関係が希薄

化した時代に生き、幼児期に高齢者との親密な関わりをもった者は少数派という現実がある。

高齢者との関わりが薄い経験で育った保育者は、高齢者に対しての親密度が低いため、関わること自体に不安を抱くのは当然であろうと考えられる。例えば高齢者との楽しい経験を幼児期に有した保育者は、「私はおばあちゃんとも住んでいたの、おばあちゃんの兄弟もすごく多くて、おじいちゃんやおばあちゃんとの関わりがすごく好きだったんです（F保育者）」といった語りをしており、実際、交流にもスムーズに取り組んでいる。しかし幼少期に高齢者との関わりがなかった保育者は、「私、お年寄りが苦手。でもこの園は他に良いところがたくさんあって、で、就職したんですけれども」と述べ、世代間交流の意義を理解し、より良い交流に向けて取り組みつつも「今でもそんなに得意じゃない（D保育者）」と語っている。

意識変容のプロセスでは、《不安と戸惑いの混在》の中で一人ひとりの努力と交流の回数を重ねることで高齢者への苦手意識も軽減され、最終的には《最善を探求する実践》が行われていくことが明らかになった。しかし世代間交流が、園児たちが初めて高齢者と接する機会のみならず、高齢者との関わりが少ない保育者にとっても最初の機会となることを考えると、交流当日に初めて参加する高齢者と接するのでは、事前準備という点において十分とはいえない。保育者への世代間交流への関わりへの導入を、より効果的に行うためには、事前準備として保育者が参加予定の高齢者とあらかじめ接する機会をもつことが有効ではないかと考えられる。世代間交流が実際に行われる中での保育者は、園児の様子や周囲の状況に注意を払うことが必要となり、自身が高齢者と余裕をもって関わることはできない。世代間交流のカリキュラムの一環としてこのような準備段階を考えることも有効であることが、結果から示唆される。

### 2. 試行錯誤の繰り返しから生まれる教育効果の気づき—保育者間で情報を共有し検証するシステム構築の重要性

《交流の受容》がされた後は、全ての保育者が《不安と戸惑いの混在》の中で試行錯誤を繰り返し、《教育効果の気づき》を得ていくプロセスが明らかになった。

保育者は交流会への事前導入として園児を連れて施設の共有スペースを訪れたり、交流会の計画を立案しなければならない。準備には時間的な制約もある。いったん交流会が始まると全く面識のない高齢者に対し、保育者には園児と高齢者の介在者としてふるまうことが求められるだけでなく、保育の専門職として世代間交流に教育的効果が上がることを期待される。例えば交流中の子どもたちの様子について「子どもたちはわりと一歩引いてる感じというか、口に出したりはないですけど、ちょっと緊張してるな」という感じ（B 保育者）」といった報告があり、保育者ゆえに【園児の尻込みが分かる】ため、どのように対応すれば良いのかが、戸惑いや不安と感知されて報告されていた。また、他の活動では活発で元気の良い子であっても、高齢者を前にすると自然な態度でふるまうことができない。高齢者に話しかけられても答えられずにいたり、今にも泣き出しそうに立ち尽くす園児までいたことが語りの中にあった。不安や戸惑いを生じさせるこれらの問題は、試行錯誤を経た《教育効果の気づき》の段階では【友だちと一緒に大丈夫そう】、【スキンシップが効果的】といった解決となる方策を得るに至っている。

このように《不安と戸惑いの混在》から《教育効果の気づき》に至るには、保育者個人の努力と工夫、経験に負うところが大きい。もちろん交流を行うにあたっての事前ミーティングや、事後の報告会は行われるのであるが、情報を共有し、有効な方法や注意すべき留意点について検証する段階がカリキュラムとして構築されれば、《不安と戸惑いの混在》の段階もより有意義となり、おそらくこの段階にかかる時間も短縮されるのではないかと推測される。試行錯誤の段階を個人の経験として終わらせるのではなく、保育者全体で情報を共有し、ともに最適な方法や技術を模索しながら今後のために蓄積していくシステムとして、カリキュラムに組み込むことが世代間交流を有効に行える一つの方策ではないかと考えられる。

### 3. 保育者の成長を促す世代間交流—保育者の意識変容に影響を与える高齢者との関係

一度世代間交流に対する意義が実感されると、さらなる有効な実践を求めようとするモチベーションが正のループとなり、《最善を探求する実践》が行われるに至る意識変容が確認された。

一般的に幼稚園の保育内容は、園児の成長を育むことに主体がおかれ、保育者の成長は特に意識されない。しかし世代間交流に取り組む保育者の意識変容の結果から、保育者もまた世代間交流を通してやりがいと手応え、面白さ、意義を感じて、モチベーションが活性化され、高齢者からの学びも得て成長していくことが示唆された。例えば夏のお泊り会などで、高齢者の有志が自主的に着替えの手助けを行うといった行動をとるなど、介護を受ける立場の高齢者が嬉々として園児をサポートする側に回る予想外の姿に、保育者は驚きと喜びの気持ちを抱えていることが報告され、具体的には「その方なりに一生懸命に手伝って下さるんですね。それがすごいな、いいなっていうか（D 保育者）」といった語りがあった。また、高齢者が園児との交流や会話を楽しみにし、会った時に喜びから涙をみせる姿に遭遇することもあり、保育者は世代間交流が園児のためだけでなく、高齢者にとっても良い効果を生じさせている気づきにも発展していた。そして、「1人、おばあちゃんが泣きながら嬉しいって言って下さった。子どもたちがどう反応するかな、と思ったんですけど。“どうしたの、大丈夫？ 病気だったの？”とか言って。他のおばあちゃんたちも握手したりしているのを見ると、行って良かったなと思います（B 保育者）」といった語りが示しているように、高齢者と幼児との本質的な関わりの重要性が認識されていた。

様々な気づきを得て交流に対する“良かった”の気持ちを得るに至る《教育効果の気づき》の【やって良かったの実感】は、保育者の心的変化のターニングポイントであり、これを境にさらなる取り組みの意欲や努力が生じ、保育者の心境は大きく変化していく。初めは交流を行うことが精一杯であった保育者が、園児と高齢者の交流の中に保育者も加わった三者の交流の中でこのターニングポイントを経て、自身が双方への効果的な声かけができるようになったと感じることや、活動内容を楽しむ園児の姿に成長を感じることで、交流に有効に関わっているという手応えをつかめるようになる。そして次回のより良い交流の実現に向けて能動的に取り組むようになり、交流する園児たちに活動の目標を具体的に設定する。「人生の大先輩じゃないですか。そういう人たちに対する接し方を学んでほしいです（C 保育者）」や、「自分から誰かを助けてあげたりとか、自

分たちから相手に関わっていく力というのを身につけてほしいなと思いますね(K保育者)」というように、高齢者からの学びの意義を認識し、子どもたちにも願いを抱くようになる。また交流後は、他の活動同様自己省察を行い、「子どもたちは楽しかったかな、次回はもっとこうしようかな(K保育者)」というように、反省点を生かそうとさらに能動的な取り組みを行うようになる。こうした自発的な取り組みの態度を経て、最終的に交流の価値を見出し、形式的な活動以上に交流の本質的な意義を確信するようになる。

このように世代間交流の場は園児と高齢者との交流だけでなく、園児と高齢者、保育者の三者の交流が行われる場である。交流を通じて三者が相互に身近な存在として認識するプロセスは、保育者の意欲の増強と向上心の促進へとつながり、より良い世代間交流の効果につながっているのではないかと考えられる。すなわち、意識変容のプロセスは世代間交流が園児の成長を促すことのみならず、保育者の資質を向上させるカリキュラムである。言い換えれば、世代間交流は園児の発達に重点を置いた従来のカリキュラムとは異なり、保育者の成長も促進する効果が期待される、新たなカリキュラムの形態になる可能性を示唆している。

#### 4. 高齢者についての認識を深めることの重要性—高齢者についての基本知識の習得と高齢者施設のスタッフとの協働関係の構築

《不安と戸惑いの混在》に【高齢者の気持ちをつかめない】があげられたり、【高齢者からの援助や応援】が《教育効果の気づき》の【やってよかったの実感】に結びついたりするなど、高齢者との関係も世代間交流における保育者の意識変容に影響を及ぼしていた。

この結果は、幼稚園の立場からは世代間交流の対象として園児にばかり注意が向けられがちであるが、世代のもう一方の対象が高齢者であることに留意すべきことを示唆している。語りの中でも例えば、「おじいちゃん、おばあちゃんも楽しんでる人はそれなりにいるんですけど、なかなか見えにくくて(J保育者)」のように、年齢ゆえか表情や反応のあまり豊かでない高齢者に対して、戸惑いを感じることが報告されていた。

個人差があるものの、高齢者は記憶力や理解力、

判断力など、認知機能にかかわる能力が加齢とともに低下する傾向がみられる。介護施設で居住する高齢者はこの傾向が顕著である場合が多く、それに加えて行動を抑制する自制コントロールも低下している場合もみられる。状況によっては認知機能の低下から、注意を要する高齢者がいるかもしれない。これらのことをふまえると、世代間交流に臨む保育者は高齢者の認知機能の傾向についての基本的知識を習得し、交流に参加する高齢者の認知機能の現状についても、施設の介護職員と情報を共有する場をもつことが世代間交流をする上で必須と考えられる。また、参加高齢者の認知機能や対人関係適応力などを把握していくことは《不安と戸惑いの混在》の段階を適切に短くし、【高齢者からの援助や応援】をより効果的に活用することも可能となる。

#### 5. より良い世代間交流に向けての提言—システムとしての枠組みの構築

世代間交流における保育者の意識変容のプロセスを検証し、①交流以前の保育者の成育歴における高齢者との親密度が、保育者の世代間交流への抵抗感の程度と関連していること、②保育者は世代間交流に関わりながら不安と戸惑いの中で改善を模索し、有効な方策を見出していくこと、③いったん世代間交流に対する意義が実感されると、さらなる有効な実践を求めていこうとするモチベーションが正のループとなること、④幼児だけでなく高齢者の基本的知識を習得することや交流参加高齢者の個々の情報共有を施設で行うなど、園児だけでなく高齢者にも重点を置くべきこと、などが効果的な世代間交流の実現に向けて留意すべき論点として明らかになった。より良い世代間交流の促進に焦点を当て、それに必要となる知識・理解及び技能を明確にするとともに、内容と方法についての検討や、世代間交流の有効性の向上を目指した指導法とシステムとしての枠組みを開発することが、今後求められると考える。

#### VI. まとめ

本研究では、幼稚園の保育活動における幼児と高齢者の世代間交流で、介在する保育者が交流に関わるプロセスを通して交流をどのように受けとめ、実行し、継続しているのかについて半構造化面接を行い、そこで生じている意識変容を検証した。



交流を受容するまでの段階では、保育者の成育歴での高齢者との親密度により、積極的または自然体で受け入れるか、努力を必要としながら馴れていくかの差異が見られた。しかし交流を受け入れスタートすると、親密度の程度に関わらず不安と戸惑いの混在の中で試行錯誤し、やがて効果的な工夫や改善を試みて、交流の教育的効果に気づきを得ていた。その後はそれらの気づきから手応えと余裕、交流によって育まれる園児の望ましい情緒や態度のイメージの形成、自然な関わりの重要性の認識が相互に作用し、より良い交流の探求と実践へとつながっていくことが明らかになった。そのプロセスの変容は自身の内的な変化だけでは不完全であり、幼児と高齢者と保育者という三者の関係性の変化が不可欠な要素である。どの保育者も一定のプロセスをたどりながら、自分なりの世代間交流を行う意義を認識するようになることが明らかになった。

2020年10月現在、幼稚園では窓越しでの交流をはじめ、コロナ禍のより良い交流が模索され、実施されている。今後も注視していきたい。

#### 付 記

本稿は、日本女子大学大学院家政学研究科児童学

専攻に提出した修士論文の一部であり、日本乳幼児教育学会第28回大会にて発表したものを加筆修正した。

#### 注

- (注1) 厚生労働省が65歳以上を「前期高齢者」としていることから、本論文でも高齢者を65歳以上と定義する。
- (注2) 幼児と高齢者に限定した交流を、「世代間交流」または単に「交流」と表記する。

#### 引用文献

- 1) 厚生労働省：令和元年国民生活基礎調査概要（2019） <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/02.pdf>（閲覧日 2020.9.9）
- 2) 徳田多佳子・請川滋大：保育における幼児と高齢者の世代間交流 —幼稚園の保護者・保育者に対する調査から—、日本女子大学大学院紀要（家政・人間生活）、26、149-157（2019）
- 3) 同上 p.150
- 4) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 —質的研究への誘い—、弘文堂、89-91（2003）